

国語科授業における「遅れがちな子ども」への 指導・支援研究

説明文「インスタント食品とわたしたちの生活」(小5)を例に

佐藤洋一* 藤井康次**

Yoichi SATO Koji FUJII

*国語教育講座

**愛知県蒲郡市立蒲郡北部小学校

1 義務教育における学力保証

2003年に行われたPISA調査では、読解力及び各分野のリテラシー能力や学ぶ意欲の低下が指摘された。またそれと同時に、低学力層、いわゆる「遅れがちな子ども」の割合の増加にともない、二極化や学力格差の拡大についても指摘されてきた。

こうした状況に対し、中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(2005年10月)では、「義務教育の根幹(機会均等、水準確保、無償制)を保証し、国家・社会の存立基盤がいささかも揺らぐことのないようにしなければならない」と、義務教育の学力保証問題責任について示された。また国語科についても「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である」とされ、国語科を他教科に生きる横断的・総合的な教科としての役割の重視が、あらためて強調された。

既に『『確かな学力』のための2002アピール』『学びのすすめ』(2002年1月)では、「確かな学力」の育成のため、少人数授業・習熟度別指導も推進されてきた。それは「個に応じた」きめ細かな指導を行い、基礎・基本の確実な定着や自ら学び、自ら考える力(課題解決、探求型の学力)の育成を目指したものである。

しかし現在、国語科で行われている少人数授業・習熟度別指導は、基礎・基本学力を定着させ、学力格差を縮めるための指導・支援は十分ではなく、学力保証問題を解決できるとは言い難い状況にある(詳細は省略する。参考文献1・10参照)。

本稿は、「遅れがちな子ども」への指導・支援研究、授業・評価開発の一環である。特に小学校高学年の教科書教材の説明的文章を対象に、基礎・基本学力の定着のための到達目標(評価基準)の明確化を図った「国語科授業・評価モデル」の開発について述べる。

2 求められる学力と授業づくり

PISA調査では読解力を「自ら目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義している。これは応用的・発展的な学力を含んでいるが、その中心部分はテキストの内容を正確に読み取り、必要な情報を判断・選択し、自分の言葉で論理的に発信(話す・書く・資料活用)することと、とらえることができる。このような学力育成に対応した授業づくりのためには、国語学力の基礎・基本から発展までの学力を評価基準レベルで明確化し、「話す・聞く」「読む」「書く」など、言語能力の構造と関連をとらえ直した発想からの授業開発が必要である。

「遅れがちな子ども」は、複合的な「遅れ」「つまずき」をかかえている場合が多い。結論的に述べると、「読む」と「書く」を関連させた正確で豊かな「読み方」(情報リテラシー)学習と、「話す」と「聞く」を関連させ、自分の解釈や意見を述べる「情報発信」学習の2つを言語技術の基本学習として行う必要がある。

3 基礎・基本学力の定着のための到達目標(評価基準)を明確にした授業・評価の開発

これまでの国語科の授業は、教材内容の詳細な読解を中心としたものと学習者主体の活動型の授業が多かった。そのため、言語技術、つまり到達目標(評価基準)を明確にした授業は、あまり意識されてこなかったと言えるだろう。

到達目標の明確化については、前出の答申において「義務教育の目標を明確化するために、学習指導要領において各教科の到達目標を明示することが必要」、また学習の評価についても「目標に照らして子どもたちのより確実な修得に資するようにすることなど、具体的な評価の在り方について今後検討が必要」と示された。到達目標の明確化は、義務教育の

責任の明確化であると同時に、子どもたちに基礎・基本学力の定着のための評価システム構築の土台とも言える。こうした考え方を授業研究レベルで具体化するためには、言語技術を到達目標（評価基準）として示すことで、学習を通して子どもたちにどんな力がついたか、量的にも質的にも評価できるようになると考えられる。

また「遅れがちな子ども」にとっても、わかりやすい到達目標（評価基準）を提示することは、子どもたちに学習の到達度を明らかにすることであり、学習に対する努力の方向性と意欲を持たせることになる。

4 「五段階の学習過程論」と授業研究論

子どもたちに到達目標（評価基準）を示しながら、学習を通してどんな力がついたか、量的にも質的にも評価したり、子どもたちの「つまずき」や「課題」を正確に診断し、そのための手立てを講じる必要がある。そのための授業改善策の1つには「学び」の段階を明確した学習過程（指導過程）論が必要になってくる。

学習指導要領の言語活動例の提示により、現在の国語科授業では、基礎・基本学力の定着のための学習を十分に（行わず）行えず、発展学習（調べ学習、発表等）に重点を置く傾向が強い。このような授業では、基礎・基本学力の定着は難しい。また、子どもの「学びの過程」が見えにくい「遅れがちな子ども」の正確な「学びの診断（評価）」ができず、個に応じた十分な指導・支援ができていないと言われている。

そこでシンプルで段階的な学習過程（指導過程）論の1つとして、「五段階の学習過程論」を提案したい（参考文献2・3・4参照）。

「五段階の学習過程論」とは、「基礎学習」「基本学習」「発展的学習」「発展学習」「評価・一般化学習」という5つの「学びの段階」を示したものである。この考え方は「遅れがちな子ども」への指導・支援論として、以下のような有効性があると考えられる。

基礎・基本学力の確実な定着化

基礎・基本学力の定着化を重視している。「基本学習」では教材をもとに内容を子どもたち全員が、「正確」に「豊か」に「読み解く」ための基礎・基本として、キーワード（情報の取り出し）、文章構成の型や情報収集や表現方法の技術を学ぶことになる。

「発展的学習」の位置づけの大切さ

「基本学習」から「発展学習」の間に、「発展的学習」を設定している。「基本学習」で学んだ「読み解く・聞く」（受信）の学習の定着度合いの確認と、「発展学習」で学ぶ「書く・話す」（発信、交流、学び合い）の学習へ補助的なステップとなっている。

ここでは1つには論理的な文章構成の型によるモデル学習を行う。このモデルによる学習は、「遅れがちな子ども」への指導・支援として、大きな成果がある。

学習シートの開発と活用の有効性

本稿での学習シートは、学習する内容を整理・焦点化させている。また子どもたちに学習目標が提示され、学習内容や方法までを明確化している。このように「何を学習すればよいか」が目に見えてわかる「学び方」のモデルを提示することで、「遅れがちな子ども」が「わかる（知る）」目標と評価、ステップ、方向などを実感し、学習に主体的に取り組めるようになる。

また、学習シートは学習段階毎に作成したため、子ども個々の学習を段階に応じ評価することができる。

から述べたように、「五段階の学習過程論」は、基礎・基本学力の定着を図りながら応用的な学力育成（課題解決能力）につながる、段階的かつ系統的な学習過程（指導過程）であると言える。

このような、学習目標・評価・学び方（言語技術）が一体化した学習過程（指導過程）は、「遅れがちな子ども」を指導・支援していくのに効果的である。また「受信・発信」「交流・評価」の学習が構造的に組み込まれているため、PISA型「読解力」の育成にも対応した学習過程（指導過程）論となっている。

5 説明的文章の指導の現状と課題

本稿では、国語科授業における「遅れがちな子ども」への指導・支援研究として、現行教科書教材の説明的文章を例に授業開発の提案を行う。

（1）説明的文章の指導の現状と課題

これまで説明的文章の指導では、文章の内容を忠実に読解（受信、教養型）させるため、接続詞・段落構成・各段落の要点を把握等の指導が中心という傾向が強い。また教材の多くは理科や社会科等の要素を含むため、調査・実験・観察を中心とする活動主義的な学習（調べ学習、発表等）に傾斜しがちである。

このような学習では、PISAが示した情報の受信・発信・一般化・評価（批評）という「読解力」の育成は難しいのではないかと。それどころか、社会が情報化・国際化し複雑になっていく中で生きていくための、他者と関わるためのコミュニケーション能力や、情報を「正確」に「豊か」に「批評的」にとらえるための情報リテラシーなど、今求められている国語学力育成には十分には対応できない。

（2）説明的文章の教材分析・解釈の観点

これらの能力を育成するための、説明的文章の授

業における「学び方」のポイントを以下に示す。

筆者の立場の理解 情報リテラシーの基礎

説明的文章では、筆者はある立場や観点から個人的に「課題」や「情報」を提示している。筆者の立場（年齢・職業・経歴・専門分野・考え方や感じ方の特徴等）を理解しておく必要がある。

また筆者の立場や独自の考え方・感じ方等から発信された情報には、筆者の課題意識や現代へのメッセージ（批評性）が込められている。現代へのメッセージの内容理解だけでなく、子どもたち自身が自分の「生な」生活経験と結びつけて受信・判断し、メッセージを自分の生き方や感じ方・考え方の再創造につなげられるような指導・評価が大切である。

常識的な価値観の理解 主張という「批評性」

説明的文章は、その時代の（学習者の）常識的な価値観に対する「批評性」が前提となっている。その時代の常識的な価値観や筆者の現代へのメッセージを比較することによって、筆者の課題意識や現代へのメッセージ（批評性）をより鮮明に理解できるようになる。

具体例と文章構成 「具体例」という個性

筆者は自分の主張に説得力をもたせるために、意図的に個性的かつ効果的な具体例を選択して、私たちに提示している。これを発信に生かし、相手にわかりやすく伝えるために、論理的な文章構成・展開、説明技術等の工夫について学ばせる必要がある。

表現方法の特色の理解 記録と描写の方法

説明的文章では、記録・報告など筆者によって選択された事実を伝える要素を含んでいる。そのため固有名詞（名前・場所等）や数字（年代・時間等）、筆者の立場からの専門的な用語も使用されている。

これらを読み解くことで、筆者の課題意識やメッセージ、批評性の特色を読み解くことにつながり、教材を「正確」に「豊か」に読むことができるようになる。

説得力を持たせる説明技術

求められる「説明力」とコミュニケーション能力

主張に説得力を持たせるためには、主張の根拠となる具体例を選択し構成することが重要である。そのために接続詞・ナンバリング・引用・要約等の技術を効果的に使用している。

また読み手に情報をわかりやすく伝達するために、情報を整理し映像化・図式化し、視覚でとらえやすい資料（写真・グラフ・表等）にして提示する。これらの非連続テキスト（資料）を読み解くための情報リテラシーの育成が必要である。

自分の立場からの理解・選択・判断 構成力

教科書教材は、論理的な文章構成の型（はじめ・なか・まとめ・むすび）を教えるための1つのモデルとなる。文字情報と非連続テキスト（資料）から

発信される情報を発信者の立場を踏まえて受信し、それを自分の立場から「収集・選択・判断・構成」し発信する方法に生かす。これは豊かで説得力のある発信・交流学习へのステップとなる。

発信・交流学习を支えるポイント

コミュニケーション能力の基礎・基本の定着

交流学习（スピーチ、ディベート等）で、相手にわかりやすく伝達するための話し方や資料の提示の仕方を工夫する。「楽しく豊かに学び合う」ために、話し手の意見や主張を正確に理解し、自分の生活経験と関連させながら課題の追求を行わせることが重要である。

自己評価・一般化学習 自己評価能力の育成

学習全体を振り返り「学び方」の観点から、各学習段階ごとに自分の学びを確認したり、新たな課題を発見できる。こうした自己評価能力の育成は、自分の考え方や価値観を修正する力（課題解決能力）＝「生きる力」となる。また「遅れがちな子ども」にとっては、学習のつまずきの自覚、努力すべき目標の理解へとつながる。

6 学習の目標と評価基準（規準）

到達目標を明確にした授業づくり

（1）学習目標

説明的文章を正確に豊かに読み解くことができる。

論理的に豊かに発信・交流する大切さが理解できる。

（2）評価基準（規準）のポイント

教材文を正確に読み解くことができる。

【内容の正確な理解】

教材文の論理的な構成（はじめ・なか・まとめ・むすび）の方法を理解できる。

【論理的な構成の理解】

読み取った内容をキーワードを使って、短い文にまとめることができる。【内容の理解と再構成】教材文に関する情報を選択し、わかりやすく説明できる。

【情報の選択と再構成】

身近な問題を取り上げて、わかりやすい発表原稿を書くことができる。【情報の発信の基礎・基本】資料（写真・図・グラフ等）を提示して、わかりやすい発表をすることができる。

【説明技術の基礎・基本】

友だちの主張を聞いて、内容をメモしたり、良い点や改善点が見つけれられる。

【コミュニケーションの基礎・基本】

学習した内容を整理し、評価・一般化できる。

【自己評価能力】

7 現行教科書教材の特質と生かし方
「インスタント食品とわたしたちの生活」
(大塚滋 小5・東京書籍)を例に

(1) 文章構成と作品の構造

- はじめ** 話題の提示・問題提起 形式段落 ~
「インスタント食品の誕生と普及」
- なか1** 具体的な事実・分析 形式段落 ~
「インスタント食品の普及と社会背景」
- なか2** 具体的な事実・分析 形式段落 ~
「インスタント食品の長所と短所」
- まとめ** 考察 形式段落
「インスタント食品との関わり方」
- むすび** 主張・結論 形式段落
「インスタント食品との共生への願い」

* 指導書の文章構成の考え方と異なる考え方である。

(2) 筆者の立場の理解

筆者の大塚滋氏は、1928(昭和3)年に生まれる。戦前に生まれ、貧困の時代を過ごした。氏は食文化の研究者の立場から、日本の食生活の変遷を体験し、インスタント食品の誕生から普及する状況をともに過ごし、それを見守り続けてきたと考えられる。本教材は食文化の研究者の立場から、インスタン

ト食品を歴史的、社会的な側面からとらえながら、現代における「豊かな食生活」を考えさせる内容である。

(3) 情報理解と「食」「食生活」「食文化」の理解

インスタント食品を例に「食」という身近で日常的なテーマを取り上げている。インスタント食品の社会背景、特色、普及の要因等から、現代の「食生活」はどうあるべきかという問題提起をしている。

女性の社会的進出という視点からの具体例

形式段落3~5段落では、女性の社会進出に着目し、インスタント食品の普及について述べている。戦後、家族構成の変化(家族を構成する人数の減少)、社会状況の変化(女性が家庭に出て働く時代の要請)の中で、インスタント食品は家事や炊事に従事する女性たちに時間的なゆとりを提供し、自立を促した。

このように「食」と家事・炊事から開放された女性の関係に注目し、インスタント食品の普及について述べている点は個性的であるといえる。

歴史的な考察や比較による本質の探究

形式段落6~7段落では、「干し飯」「そばかき」「葛湯」を例に、非常用の食糧としてのインスタント食品の起源について述べている。またインスタント食品の昔と現在を比較することで、現在のインスタ

資料1 学習計画(10時間完了)

段階	時間	主な学習活動	評価の観点と指導・支援	到達目標(評価基準)
導入・基礎学習	1	1 身近なインスタント食品について知っていることを書く。 2 教材文「インスタント食品とわたしたちの生活」の範読を開き、感想を書く。 3 学習の見通しをもつ。 4 文章構成について理解する。 5 語句の意味の確認をする。 6 教材文を音読・斉読する。	1 【学習シート1】を使用する。 2 【学習シート1】を使用する。 3 【学習シート9】で目標を確認し、○をつける。 4 【学習シート1】を使用する。 5 【学習シート2】を使用する。 6 読むスピードを合わせて、何回も繰り返して読むようにする。	《B基準》 ①身近なインスタント食品について興味・関心を持ち、学習に対する意欲を持てる。 ②本文を、新出漢字、難解な語句を確認しながら、意味や段落のまとまりを意識して、すらすらと正確に音読できる。 《A基準》(B基準の習熟・熟達:例) ①学習シートを全部埋められた。 ②すらすらと正確に音読できる。 《C基準》(B基準の部分な理解・到達) ①学習に意欲が持てない。 ②すらすらと正確に音読できない。
	2	1 本文を段落ごとにナンバリングする。 2 本文の文章構成(はじめ・なか・まとめ・むすび)の理解、大まかな内容を確認する。 3 「まとめ」を要約する。 4 インスタント食品の誕生の背景と普及について理解する。 5 説明技術の良さに気づく。	1 形式段落ごとに正確にナンバリングさせる。 2 【学習シート3】を使用し、キーワードで空欄を埋め、キーワードをもとにインスタント食品の誕生と普及を理解できた。 3 「まとめ」を25字以内で要約させ記入させる。 【学習シート3】を使用。 4 【学習シート4】を使用する。昔も今も変わらない便利さに気づかせる。 5 【学習シート4】を使用する。順序よく、分かりやすい説明技術を理解できるように説明する。	《B基準》 ①論理的な段落構成を理解でき、キーワードを読み取れた。また要約をまとめることができた。 ②キーワードをもとにインスタント食品の誕生と普及を理解できた。 ③わかりやすい説明技術の2つの方法やその効果を理解できた。 《A基準》(B基準の習熟・熟達:例) ①学習シートを自力で埋められた。 ②学習シートをヒントをなしにできた。 《C基準》(B基準の部分な理解・到達) ①キーワードが読み取れない。 ②インスタント食品の背景や普及を説明技術が1つしかわからない。

発展的学習	1	1 1 学級全体で「豊かな食生活」について考えて、話し合うテーマを決める。 2 教材をモデルに、原稿の書き方を学ぶ。 3 聞き手にわかりやすい文章を書く。 (1)4段階の文章構成で書く。 (2)学習した説明技術を使う。具体例の比較、ナンバリング、つながりなど。 (3)「むすび」で自分の意見や主張を書く。 4 書いた原稿をもとに、ディベート組み立てシートを作成する。 5 発表する資料を準備する。	1 「豊かな食生活」について自由に発言させる。 【学習シート9】で目標を確認する。 2 発表原稿モデルを使い、書き方を教える。 3 (1)4段階の文章構成で書いているかを確認する。 【学習シート5】を使用。 (2)具体例と良い点と問題点を、ナンバリング、つながりごとをば使っているか。 (3)自分の意見や主張が聞き手に訴えるように書く。 4 書いた原稿をもとに、ディベート組み立てシートの作成を確認する。 5 発表内容に合った資料を選ばせる。	《B基準》 ①「豊かな食生活」について自分の意見が持てる。 ②4段階の文章構成で説明技術を使って文章を書くことができた。 ③発表に必要な資料を選べた。 《A基準》(B基準の習熟・熟達:例) ①個性的で思いやりや温かきを感じる意見を持てた。 ②説明技術を使い、順序よくわかりやすい文章が書けた。 ③発表に効果的な資料を何枚か選び、わかりやすい発表ができた。 《C基準》(B基準の部分な理解・到達) ①自分の意見がもてない。 ②文章構成・説明技術が理解できない。 ③資料が選ばない。
	2	1 話し方・聞き方の「基本」を学ぶ。 2 グループでテーマについて賛成か反対で分かれて、ディベートをする。 (1)話し手は作成した「ディベート組み立てシート」をもとに、資料を提示しながら発表する。 (2)聞き手はメモをしなが、話し方や内容や評価する。 (3)ディベートの結果を判定する。	1 【学習シート7】を使用。 【学習シート9】を使い目標を確認させる。 2 話し方の「基本」を踏まえて、発表原稿を繰り返し音読させる。【学習シート6】を使用する。 (1)話し手の基礎・基本が意識して発表させる。 (2)【ディベート判定シート】を使い、話し手の話す内容のキーワード化し、メモさせる。また発表に対して意見や感想を持たせる。 (3)どちらの主張が説得力があったかを判定させる。	《B基準》 ①話し方・聞き方の「基本」にしたがって、話に集中できた。 ②資料をわかりやすく提示できた。 ③ディベート判定シートに従い、判定ができた。 《A基準》(B基準の習熟・熟達:例) ①友だちの個性に気づき、自分の意見や疑問を持つことができた。 ②資料の内容がよく、提示の仕方も効果的である。 ③判定した理由や基準を明確に説明できる。 《C基準》(B基準の部分な理解・到達) ①話に集中できていない。姿勢が悪く声が小さい。メモが取れない。 ②説明内容と資料が合っていない。 ③話し合いに参加していない。
評価・一般化学習	1	1 学習全体を通してわかったことや考えたことなど、学習の振り返りとまとめをする。 2 1について学級で交流させる。	1 【学習シート9】を使用し、学習の振り返りを行わせる。 2 意見を交流させることで、友だちの問題意識を自分に置き換えて考えさせる。	《B基準》 ①学習から考えたことや学んだことをまとめ、今後の課題に結びつけられる。 《A基準》(B基準の習熟・熟達:例) ①友だちの意見や感想から自分の問題意識に結びつけられている。 《C基準》(B基準の部分な理解・到達) ①新たな課題が発見できない。 学習した内容が理解できない。

ント食品の良さや問題点を明らかにしている。

子どもたちへの食育教育としての側面

現代の子どもたちは、食べ物をはじめ、多くのものに囲まれた生活を送っている。いわばそれがあたりまえの生活である。そのような満ち足りた状況では、「食」の大切さを実感できない子どももいる。

人間にとって「食」は単に体の成長だけをもたらすものではなく、生活のリズムを整えたり、家族の温かさに気づかせたり、豊かな人間関係の構築に不可欠なものでもある。子どもたちには何気ない毎日の食事から、自分自身の食生活、家庭生活、人間関係を振り返らせ、「食」の大切さを実感させることが必要である。

(4) 現象の分析的・構造的な見方の育成

形式段落8～14では、筆者の分析的・構造的な見方として、インスタント食品の長所と短所を挙げている。ここでは、単なる二面性というとらえ方だけでなく、「むすび」で書かれている「豊かな食生活」という視点から考えさせることが重要である。

(5) 説明的文章の「読み方」のモデル学習として

子どもの発達段階を考えると、中学年から抽象的な思考(論理的な形式操作)が可能となる。本教材は、「食」という身近な題材を通して、発達段階の特性を生かしつつ、論理的な文章の読み方(情報リテラシー)と活用・発信技術(コミュニケーション・プレゼンテーション能力)を楽しくシンプルに教えることができる。

(6) 「インスタント食品とわたしたちの生活」の「学び方・評価」のポイント...「8 学習計画」参照

〔基礎学習〕...資料2参照

漢字や難解な語句・段落構成・意味のまとまりに注意しながら、全文をすらすらと音読できたか。
論理的な文章構成(はじめ・なか・まとめ・むすび)について理解できたか。

〔基本学習〕...資料3～5参照

「むすび」「まとめ」を理解し文章構成の型とキーワードを理解できたか。

「なか」の具体例の数と内容が理解できたか。

説明の仕方の工夫を理解することができたか。

〔発展的学習〕...資料6参照

ディベートをするために、自分の身近なことへの疑問(テーマ)を持ちキーワード化できたか。

学習した説明技術を使って、聞き手にわかりやすい発表原稿を書くことができたか。

「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」の4段階の構成で、発表原稿を書くことができたか。

〔発展学習〕...資料7参照

相手を意識した姿勢や視線、声の大きさや速さで話すことができたか。

資料の選択と活用、提示の仕方を工夫して発表で

きたか。

話し手の良い点や問題点について、意見や質問等を持つことができたか。

〔評価・一般化学習〕...資料8・9参照

学習した内容(到達目標)を意識して、自己評価・一般化ができたか。

(7) 学習シートの開発・活用と授業展開のポイント

本稿では、9枚の学習シートを開発し、授業モデルを構想した。学習シートを用いることにより、子どもたちに基礎・基本学力を踏まえた説明的文章の「学び方」を明示できるとともに、教師が子どもたちの学びの様子(つまずき等)を段階的に把握し、評価できる。

以下、授業の展開と学習シートの活用の方法(要点のみ)について述べる。

学ぶ意欲の喚起と読みの実態把握

教材の読みに入る前に、インスタント食品について自分の生活経験を振り返らせ、学習への興味・関心を持たせる。また、資料2(学習シート1)に初読の感想として、面白い・興味をもったところを理由や根拠を明らかにさせながら、段落ごとに短く書かせる。筆者の主張の意義を考えさせることで、教材内容の解釈や理解の実態、つまずき等を把握できる。

説明的文章の「読み方」の観念の提示(基本学習)

資料3～5(学習シート2～4)を用いて、文章構成の型、筆者の立場、筆者の課題意識、個性的な表現、具体例の数と内容、効果的な説明技術等、説明的文章の「読み方」の観念を意識させる。これらの学習は「論理的思考力・説明力」を育成するための基礎・基本であり、また他の情報、教科書等を読み解く際の観念となる。

学習シート2では、説明的文章を読み解くために欠かせない文章構成、キーワード、筆者の立場について学習する。学習シート3では、教材の内容や構成の型を理解しやすいように、文章構成ごとにキーワード・キーセンテンスを用いて、1枚のシートにコンパクトにまとめた。学習シート4では、時代背景、具体例の数と内容、わかりやすい説明技術について確認させる。

発展的学習における基礎・基本学習のまとめ

発展的学習では、基本学習での説明的文章の「読み方」を生かし、論理的・個性的に発信するステップとして、基礎・基本学習で学んだ観念を応用した「個性的で相手に納得してもらえる、わかりやすい」文章を書くことを目標とする。

資料6(学習シート5)では、子どもたちの生活で身近なこと(問題意識)をテーマとして、論理的な構成の型(はじめ・なか・まとめ・むすび)を使って文章をまとめるように指導する。なお学習シート5で書いた文章は、そのまま発表原稿として使用で

きる。文章を書くことが苦手な子どもには、文章構成ごとに、いくつかの支援のステップを設ける（選択、キーワード化等）。

コミュニケーション能力の育成として交流学习

交流学习では発展的学習・発展学習で作成した学習シート5を生かして、ディベートを行う。ディベートは「話す」「聞く」の応用レベルであるため、資料7(学習シート6)を使って発表内容を再構成したり、ディベートを円滑に進行させるために、話し方・聞き方の基本モデルを学習させておく必要がある(資料8:学習シート7)。また友だちの主張を「正確に」理解し評価するために、キーワードをメモさせる段階を設定する。

これらの発信・交流学习で示した観点は、今求められている国語学力の基礎・基本であり、到達目標(評価基準)を子どもたち1人1人に明確に自覚させる役割も担っている。

「学び方」の観点の定着(評価・一般化学習)

資料9(学習シート9)は学習に入る前から、子どもたちに提示することで「学び方」の観点を意識させたり、学習の到達度が見えるようにしておく。また、学習全体を振り返ることで、学習した内容の意味が明確になり、定着できるようになる。それを次の学習や生活、読書に生かそうとする意欲・態度の育成ともなる。

8 学習計画(10時間完了)(資料1を参照)

9 研究の成果と考察 まとめにかえて

(1) 段階的な学習過程の有効性

「五段階の学習過程論」は、系統的・段階的に「受信」から「発信」「交流」「評価」「一般化」までの学び方を身につけられる。また、教師が「遅れがちな子ども」の「学びの診断」が可能となり、それに対応した効果的な支援、授業改善に生かせる機能も持っている。

(2) 本稿における学習シートの開発と活用

「学び方が見える」「学びの過程が見える」学習シートの開発・活用により、「何を学べばいいのか」という到達目標(評価基準)が明確になる。「遅れがちな子ども」も「学び方」やステップ、「目標と評価」が示されることで、意欲的に取り組むことができる。

(3) 新しい国語科の基礎・基本学力の定着

PISA型読解力が新しい国語学力として重視される中で、言語技術を到達目標(評価基準)の1つとしてとらえ、段階的な「学び」の質・量のみえる学習過程で授業を進めることにより、国語科の基礎・基本学力が定着できる。基礎・基本学力の定着により「遅れがちな子ども」への指導・支援がより具体的にとなる。

資料2 基礎学習 学習シート1(学習への興味・関心の喚起、課題意識チェックシート)

学習シート1
 『インスタント食品とわたしたちの生活』
 大塚 滋
 番号
 氏名

1 インスタント食品について知っていることを発表しよう。
(1) どんなインスタント食品がありますか。またどんな時に食べますか。

インスタント食品名	いつ食べますか・味についてなど				

2 『インスタント食品とわたしたちの生活』を読もう。
(1) 意味のまとまりを意識して、すらすらと音読をする。
(2) 段落と構成を考えながら音読する。
(3) みんなのスピードに合わせて音読する。

段落	理由	段落	理由	段落	理由

3 『インスタント食品とわたしたちの生活』を読んで、面白かった・興味を持った段落はどこですか。理由も書きましょう。疑問でもかまいません。

4 『インスタント食品とわたしたちの生活』で、筆者が一番言いたかったことは何ですか。(自分の言葉でも、本文のことばでもどちらでもかまいません)

5 『インスタント食品とわたしたちの生活』を読んで考えたことを書きましょう

おわりに

「遅れがちな子ども」への指導・支援方法と言え、教材の音読練習や漢字のスキルの指導などのいわゆる基礎学習の段階にとどまっていた。しかしPISA型「読解力」が重視される中で、そういった学習のみでは対応しきれず、このままではますます二極化や学力格差は拡大すると考えられる（参考文献7・8参照）。

こうした切実な教育課題に対応するためには、子どもたち全員が教材を正確に読み解き、自分の判断や解釈をもって効果的に発信できる学習システムや授業開発が必要である。義務教育における学力保証という点から考えても、「遅れがちな子ども」の視点からの指導と評価の一体化した授業モデルの研究・開発が、今後の緊急の教育実践課題の1つである。

付 記

本稿は愛知教育大学大学院・平成18年度修士論文・教育学研究科「『遅れがちな子ども』への指導・支援研究 基礎・基本学力の定着のための到達目標(評価基準)の明確化」(藤井康次/指導教官・佐藤洋一)の一部をまとめたものである。まとめるに際し、「遅れがちな子ども」への基礎・基本学力の定着のための「授業・評価」の開発提案に重点を置いた。説明的文章指導の現状や変遷、授業研究論の課題と方

向等についての詳細な考察、その他の提案については、別の機会に論じることとしたい。

主な参考文献

- 1 佐藤洋一「国語科における習熟度別・少人数学習の開発 一斉学習で全員に『確かな学力』を保証し、『個に応じた指導・評価』を行う授業づくり」『SCOPE NO.9』(愛知教育大学教育実践総合センター 2006.3)
- 2 佐藤洋一 連載「到達目標としての『言語技術』」(『教育学国語教育』明治図書 2005.4~2006.3)
- 3 佐藤洋一 陸山江梨子「事実・生き方の記録(ノンフィクション)の『学び方・評価』学習」(愛知教育大学研究報告 第54輯 2005.3)
- 4 佐藤洋一 野々山由佳「論理的で豊かな『聞く力』『話す力』を育てる国語科授業・評価の開発」(同上 第56輯 2007.3)
- 5 佐藤洋一編著『実践・国語科から展開するメディア・リテラシー教育』(明治図書 2002.9)
- 6 佐藤洋一編著『国語科を核に総合的学習を創る』(明治図書 2000.4)
- 7 佐藤洋一「言語技術を組み込んだ授業システムを」(『現代教育科学 2006年4月号』明治図書 2006.4)
- 8 鈴木悟志作成 研修資料「国語科指導における教材研究のあり方 説明文をモデルにした情報リテラシーの学習」(平成18年度「10年経験者研修・教科指導研修」愛知県総合教育センター 2006.8)
- 9 愛知県刈谷市東刈谷小学校公開研究発表会資料(2006.11)
- 10 佐藤学著『習熟度別指導の何が問題か(岩波ブックレット)』(岩波書店 2004.1)

(平成19年9月14日受理)

資料3 基本学習 学習シート2 (論理的な文章構成の理解)

筆者について

大塚 滋 (おおつか しげる)

一九二八(昭和3)年、新潟県生まれ。大阪府立大学、米国ウースター生物学研究所、大阪大学理学部卒業。理学博士。現在評論や創作活動などを行う。専攻は食文化論。日本化学会会員、日本文芸家協会会員 『たべもの文明考』(朝日新聞社) 『食の文化史』(中央公論社) 『パンと麵と日本人』(集英社)

☆キーワードとは

その段落の内容を一語又は二語で表している(大切なことば)。

```

        graph TD
            A[はじめ  
問題提起  
話題  
テーマ] --> B1[なか 1  
具体例1  
事実・仮説  
実験・調査]
            A --> B2[なか 2  
具体例2  
事実・仮説  
実験・調査]
            B1 --> C[まとめ  
筆者の意見  
「なか」の  
まとめ]
            B2 --> C
            C --> D[むすび  
筆者の主  
張・訴え  
や考察]
            
```

☆文章の組立を理解しよう

書かれている内容

読み方(ポイント)

むすび	まとめ	なか	はじめ	組み立て	読み方(ポイント)
一般化している。	筆者の言いたいことが述べられています。(結論)「まとめ」の内容を一般化している。	「なか」で書いたこと「まとめ」が書かれています。	「なか」を選んで「具体例」や「事実」を選びます。	「筆者の疑問」(話題やテーマ)「みなに何を考えてほしいのか、投げかけています。」	「なぜ」「どうか」「どうしよう。」ということばを探していきましょう。
					「まとめ」の段落の「短いことば」に注目してみましょう。
					具体例の数と内容に注目しましょう。
					ここでは「インスタント食品」の話から、「豊かな食生活」へと話題が広がっているね。

学習シート2

『インスタント食品とわたしたちの生活』

大塚 滋

番号

.....

氏名

.....

資料4 基本学習 学習シート3 (内容の理解と具体例の選択の仕方の理解)

むすび	まとめ	なか 2		なか 1				はじめ			段落
⑮		⑭ ⑬ ⑫ ⑪	⑩ ⑨ ⑧	⑦ ⑥ ⑤ ④	③ ② ①						
インスタント食品と私たちの生活	インスタント食品の扱い方	インスタント食品の	インスタント食品の	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	インスタント食品の誕生の背景と昔のインスタント食品	話 題
り上げた。		③ ② 料理が下手になる ① 家ごとの味が失われること	③ ② 長い間保存ができる ① インスタント食品の良い所	「歴史的背景」昔からインスタント食品はあった 「干し飯」「そばがき」「くず湯」等ふだんの食事よりもかなり違うが、何よりも 【社会的背景】 炊事にかける時間が変わってきた 料理の時間を短くできるたいへん便利なもの	☆ 筆者からの問題提起 (2つ)	書 かれて いる 内 容					

☆説明文の構成をつかみ、内容を整理しよう
 (1) 「まとめ」の段落番号を書こう。
 (2) 「まとめ」を二五字以内で要約しよう。

学習シート3
 『インスタント食品とわたしたちの生活』
 大塚 滋

番号
 氏名

資料5 基本学習 学習シート4 (具体例の選択の仕方・説明技術・筆者のメッセージの理解)

学習シート4
 『インスタント食品とわたしたちの生活』
 大塚 滋

番号
 氏名

1 インスタント食品がかんげいされた背景を考えてみよう。【なか1】④⑤⑥⑦段落】
 ① いつですか
 年ごろ
 ② それはどんな時期ですか

2 インスタント商品の普及は社会の変化に後押しされていますが、どんな社会変化がありましたか。2つ挙げてみましょう。【④段落】
 ① 時代へと変わりつつあったため
 ② 時代へと変わりつつあったため
 ③ 時代へと変わりつつあったため

3 昔のインスタント食品と現在のインスタント食品との共通点と相違点はなんですか。
 共通点
 相違点

2 具体例の提示のされ方に注目しよう。どんなふうがされているか考えてみよう。
 (1) 「なか2」ではインスタント食品の良い点が3つあります。つなぎことばに注意しながら、抜き出しましょう。また三つの良い点を大切な順に番号をつけてみよう。
 良い点
 つなぎことば
 重要度
 示された具体例
 家庭で手をかけて作る料理と、あまり変わらない味やかおりがある。

ヒント 良い点は⑧・⑨・⑩の三つの段落に書かれています。
示された具体例がわからないときは、本文の文の一つをそのまま抜き出してみよう。

(2)「なか3」のインスタント食品の問題点が提示されています。提示の仕方の工夫を考えてみよう。

ナンバリング	重要度	示された具体例
一つ目には		
二つ目には		
三つ目には		

ヒント 問題点は⑫・⑬・⑭の三つの段落に書かれています。
一番最初の文に注目しよう。

(3)「つなぎことば」や「ナンバリング」がある文章の、聞き手の印し方や効果を考えよう。

3 食事を「インスタント食品だけ」で済ませるだけでなく、インスタント商品を料理の一部として使うといった工夫が必要」と筆者は述べていますが、どんな工夫が考えられますか。(教科書に書いてあることでもかまいません。それ以外のことをさがせるかな?)

4 「むすび」の段落について、「豊かな食生活」とはどのようなものだと思いますか。「むすび」⑭段落

ヒント 楽しい食事やおいしい食事はどんなものですか。どんな時、だれと食べた時かな?

資料6 発展的学習 学習シート5 (論理的な構成における発表原稿の作成シート)

むすび	まとめ	なか 2	なか 1	はじめ	構成
主張	考 察	問題点	良い点	話 題	話題
・まとめから分かったことや考えたことを書く。	・「なか」で分かったことを書く。(1)のように...と始める と書きやすい)	・「なか」で分かったことを書く。(1)のように...と始める と書きやすい)	・「つなぎことば」や「ラベリング」を使って分かりやすく説明する。 ・説明するとき使用する資料(図・写真など)を準備する。	・「つなぎことば」や「ラベリング」を使って分かりやすく説明する。 ・説明するとき使用する資料(図・写真など)を準備する。	・テーマを伝える。 ・わかりやすく伝えるために疑問文を入れる。
					構成のポイント
					発表原稿

☆相手に納得してもらえる、分かりやすい文章を書こう。

学習シート5
『インスタント食品とわたしたちの生活』
大塚 滋
発表原稿
番号
氏名

資料9 評価・一般化学習 学習シート9 (メタ評価能力・到達度チェックシート)

2 この単元の学習を通して考えたことや思ったことを書きましょう

聞くこと			話すこと		書くこと				読むこと				音読		活動
③	②	①	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	②	①	番号
															目標
															学習の内容
															評価

1 学習の目標を知り、自己評価しよう。

学習シート9 学習チェックシート
『インスタント食品とわたしたちの生活』

番号
氏名